

# 社説におけるハズダ文の研究

——前後の文脈と機能の論理関係、同質化効果に関する一考察——

大水 利之

## 要 旨

本研究の目的は社説（議論文）を考察の対象とし、議論の論旨全体に視点を据えて、ハズダ文が前後の文脈でいかなる機能と効果を持つのかを明確化することである。研究の第一部では用例分析によって、①問題提起〈トピックセンテンス化〉と提言への接続、②提言の帰結、③批判の3種類の主な機能を抽出した。ここでの分析によって、ハズダはその使用局面と前後の文脈の論理展開から、相手に対して強い情報メッセージを発信していることが分かった。第二部では各機能系から導き出されたハズダの同質化効果の定義づけを試みた。結果、ハズダは前後の文脈に置かれている提言と密接に結束し、同質化効果によって相手に論理的に訴え、理想の具現化に向けて行動を促す意図をもって用いられるという結論に達した。

キーワード：同質化、推量のモダリティ、問題提起〈トピックセンテンス化〉、  
提言への接続、提言の帰結、批判

## 0. はじめに

ハズダは形式名詞と助動詞で構成されている。このハズダは何らかの根拠に基づいて、話者が次の状況や展開を予想する推量のモダリティの一つである。しかし、単なる推量を述べるだけなら、ト思ウ、ラシイ、カモシレナイ、ニチガイナイなどの類似モダリティでも表現することができる。これらの相違は単に推量の確かさの度合いによるものだけではない。使用場面において、推量以外の何らかの意味が与えられているはずである。

本稿では社説で用いられているハズダ文が、いかなる意味機能を持って用いられているのか、論旨全体に視点を据えて、特にハズダが使用される局面の前後の文脈との論理関係に注目し、社説におけるハズダ文の機能と効果について分析と考察を試みる。

## 1. 先行研究

先行研究は巨視的な対象として一般化のハズダを扱った寺村（1984）を、微視的な対象として社説のハズダ文を文全体の論理展開の視座から分析した劉（1998）の考察を、及び意見文のハズダの意味用法の分析を試みた金子（2000）の研究を紹介する。本研究では劉（1998）と金子（2000）の研究を基盤としている。以下に各要点を記す。

### 1.1 寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』

寺村はハズダの意味・用法について「ある事柄の真否について判断を求められたとき、あるいは自分で判断を下すべき場面に直面したとき、確言的には言えないが、自分が現在知っている事実（P）から推論すると、当然こう（Q）である、ということを使うときに使われる」と述べている。概言的判断である「ダロウ、マイ、カモシレナイ、ニチガイナイ、ソウダ、ヨウダ、ミタイダ、ラシイ、ソウダ」等の表現と異なる点は「自分の推量というのではなくて、これこれの事実（P）があれば当然こう（Q）なる、そういう状況にあることを相手に伝える表現だという点である」と指摘している。

類義表現のコトニナルが、P（前提）→Q（結論）のPを聞き手に明確に認識させた上での客観的推論であるのに対し、ハズダはPを言わなくてもよく、「何らかの客観的な事実からの推論の結果のものだということを手相に印象づけようとする心理から出てくる表現」だとしている。

### 1.2 劉向東（1998）「社説における『はずだ』と『わけだ』の使用状況と機能について」（ハズダの考察部分を要約）

劉は社説におけるハズダの機能を、①コメントを導き出す「はずだ」と②主張をまとめる「はずだ」に二分類した。前者は「現実に対する書き手の不満或いは不安を表明した上、さらにコメントを付け加える役割を果たす。その後続文は、大抵、希望、要求、警告、提案、批判など書き手の意見を表すものであり、『たい』、『なければならない』、『べきだ』、『ではないか』といった文型が良く現れる。」と述べている。コメントを導き出す「はずだ」は、「P→Qはずだ」の前提P（書き手の知識や常識）が潜在化する用例が多く、これらの「はずだ」文は、先行文脈よりも後続文脈へ直接かつ密接に関わると考察している。

一方の主張をまとめる「はずだ」についても、後続文脈との関わりが強いことに変わりはない。ただし、こちらは関わりの範囲が広範囲に及ぶ。そして、主張をまとめる「はずだ」は「後続段落のトピックセンテンスとなり、強い結束力を示す」ことが特徴であると結論づけている。

### 1.3 金子比呂子 (2000) 「『ハズダ』の意味と用法 –意見文における使い方–」

金子は意見文のハズダを①ナル（変化）ハズダ系、②デキル（可能）ハズダ系、③アル（存在）ハズダ系、④タイ（感情）ハズダ系に分類し、各意味用法の分析と考察を行った。

ナル（変化）ハズダ系は文中の先行文脈にまず、提言が顕在、あるいは潜在化されて存在しており、続くナルハズダ文によって好ましい状況が示唆され、読者にそれを確認させることで、提言を再度強く印象づける機能があると分析している。変化ハズダ系（変化動詞+ハズダ）も同様の機能を有する。但し、ハズダで示唆された好ましい状況への変化を訴える要求度が高まるようだと述べている。

デキル（可能）ハズダ系は、能力・可能性の存在の強調か、あるいはそれが発現されていない現実の強調かによって機能が異なる。前者は本来持つ潜在的能力、可能性を示唆し、気づき、そして発現に至る努力を促す機能であり、後者は発現に向けて努力しない相手への非難、叱責、努力の命令の機能である

アル（存在）ハズダ系は、アルハズの大切なものへの気づき、本来、あるべき姿を考えて、行動せよという提言が発信されているとしている。

タイ（感情）ハズダ系については「『タイハズダ』を使うと、その願い、その欲求は本来的なものであるということが強調され、それが生かされていない現実の含み持つ問題がクローズアップされる」と分析している。

## 2. 研究目的と方法

本研究では金子（2000）の分類を踏まえ、新聞の社説に見られるハズダ文を分析・考察の対象とする。大水（2009）はハズダがいかなる効果を持って用いられるかに注目し、金子（2000）の研究を発展させた形で意見文におけるハズダの機能と効果の用例分析を試みた。しかし、その考察の領域はハズダ文が用いられる局面とその前後の文脈の範囲に限られたものであった。

本研究では議論の論旨全体に視座を据えた上で、ハズダ文が先行文脈や後続文脈とどのような論理関係にあるのか、論旨全体の流れの中でハズダ文がどのように導き出されるのか、その機能と効果について検証を行うことが目的である。

本研究では、金子（2000）の品詞別分類に従い、①ナル（変化）ハズダ系、②デキル（可能）ハズダ系、③アル（存在）ハズダ系の3分類を分析・考察の対象とする<sup>1</sup>。また、本研究では金子が使用した分類名をそのまま用いることとする。なお、変化ハズダ系は、変化動詞+ハズダの用例であることを付記しておく。

研究方法は、第一部では各ハズダ系の用例分析を行い、金子（2000）が考察したハズダの機能、及び大水（2009）の研究結果を再検証する（作表して整理する。）。続く

<sup>1</sup> 金子（2000）はタイ（感情）ハズダ系も考察の対象としたが、本研究では動詞+ハズダのみを分析の対象とした。

第二部では、大水（2009）の分析・考察によって導き出された意見文のハズダがめざす同質化の定義について、第一部の考察に基づいて明確にする。これらの考察によって、ハズダ文が社説の論旨全体の中でどのような機能と効果を持って用いられるのか、そして先行文脈や後続文脈とどのような関わりを持つのか明らかになると考える。

### 3. ハズダの分類、機能の分析と考察

#### 3.1 ハズダの分類表

表1は金子（2000）の分類に基づき、筆者が社説におけるハズダの機能について再検証した結果をまとめたものである。用例分析の結果、①問題提起〈トピックセンテンス化〉と後続提言への接続、②先行文脈での提言を帰結、③批判の三つの機能が抽出された。これらの機能はナル（変化）ハズダ系、デキルハズダ系、アルハズダ系に共通する。また、[ ]内は各機能の論理展開の類型を示す。これらも各機能に類似、共通した特徴が見られる。

なお、本稿の末尾に参考資料として金子（2000）の機能分類に基づいて筆者が作表した表5を添付した。金子（2000）の機能分類と分析、考察の結果を社説に絞って再検証したものが表1であり、各機能系に前述の三種類の機能の共通性という特徴が現れていることが分かる。金子（2000）が分析、考察の対象とした意見文の用例は新聞記事、小説、エッセイ、テレビコマーシャル等、広範囲の資料であるが、社説（議論文）におけるハズダ文の本質的な機能群が既に指摘されていることが表5から伺われる。

社説の用例収集先は朝日新聞（2007年1月～2009年7月：社説総数2019件）である。その中から計104例を収集した。用例の内訳は次の通りである。

ナルハズダ系7例、変化ハズダ系31例、デキル（可能）ハズダ系21例、アル（存在）ハズダ系8例、イル（存在）ハズダ系1例、ナイ（非存在）ハズダ系1例、タイ（感情）ハズダ系2例、名詞ノハズダ系4例、形容詞ハズダ系4例、（否定の）ナイハズダ系4例、ハズハナイ系19例、助動詞ハズダ系2例。これらのハズダ系から考察に足る用例が集まったナルハズダ系、変化ハズダ系、デキル（可能）ハズダ系、アル（存在）ハズダ系を分析の対象とした。

表1 社説におけるハズダの機能分類表

分類		ハズダの機能 ([ ] は前後文脈との論理展開の類型)
ナル (変化) ハズダ系	ナルハズダ系	機能① 問題提起〈トピックセンテンス化〉と後続提言への接続 [問題ありの状況(先行文脈での議論)→ナル(変化)ハズダ文(問題提起)→後続文脈での論者の提言(～ベキダ/～テホシイ/～デハナイカ)]
	変化ハズダ系	機能② 先行文脈での提言を帰結(具体的行動の促し) [問題ありの状況(先行文脈での議論)→論者の提言(～ベキダ/～テホシイ/～デハナイカ)→ナル(変化)ハズダ文(提言の帰結)→(議論のまとめ)]  機能③ 批判(理不尽な言動等に対する論理的な訴え) [問題発生→(問題の検証)→ナル(変化)ハズダ文(批判)]
デキル(可能)ハズダ系		機能① 問題提起〈トピックセンテンス化〉と後続提言への接続 [問題ありの状況(先行文脈での議論)→ナル(変化)ハズダ文(問題提起)→後続文脈での論者の提言(～ベキダ/～テホシイ/～デハナイカ)]
		機能② 先行文脈での提言を帰結(具体的行動の促し) [問題ありの状況(先行文脈での議論)→論者の提言(～ベキダ/～テホシイ/～デハナイカ)→ナル(変化)ハズダ文(提言の帰結)→(議論のまとめ)]  機能③ 批判(理不尽な言動等に対する論理的な訴え) [問題発生→(問題の検証)→ナル(変化)ハズダ文(批判)]
アル(存在)ハズダ系		機能① 問題提起〈トピックセンテンス化〉と後続提言への接続  機能② 提言の帰結(気づきの促し/再考・改善の促し) [問題ありの状況(先行文脈での議論)→論者の提言(～ベキダ/～テホシイ/～デハナイカ)→アルハズダ文(提言の帰結)]  機能③ 批判(問題の本質を無視、または気づかぬ相手への訴え) [問題ありの現状→(問題の検証)→アルハズダ文]

金子(2000)に基づいて作表(2009.10)

## 3.2 ハズダの機能の分析と考察

この章ではそれぞれの機能が社説全体の論旨の中でどのように導き出されるのか、ハズダが用いられる局面の前後文脈との関係を軸として分析を行う。ここではそれぞれの機能の典型的な用例として、ナル（変化）ハズダ系からは機能①の問題提起（トピックセンテンス化）と後続の提言への接続を、デキル（可能）ハズダ系からは機能②の提言への帰結を、そして機能③はアル（存在）ハズダ系の批判（問題の本質を無視、または気づかぬ相手への訴え）を取り上げる。

以下、各機能系と論理展開の関係について論じる（用例の社説の下線と太字ゴチック体化は筆者による。提言に相当する部分には波線の下線を引いた。また、ローマ数字は段落を、丸数字は一つの文を表す。）。

### 3.2.1 ナル（変化）ハズダ系

#### 用例1 機能① 問題提起（トピックセンテンス化）と後続の提言への接続

「追加経済対策 未来の構想力が試される」(朝日 09.3.14)

- I ①「100年に1度の危機」なら、そこからの脱出には、明治維新や敗戦後に匹敵する国造りへのエネルギーが必要になる。②それだけの大事な仕事に臨む戦略と実行する政治力があるのか。
- II ③国民の多くが麻生政権に問うているのは、まさにそこである。
- III ④麻生首相は与党幹部に、追加経済対策の検討を指示した。⑤09年度補正予算案のほか、複数年度にわたる対策をつくる。⑥各界各層の英知を集めて具体案を練り上げるといふ。
- IV ⑦昨年10～12月期の経済成長率は、第1次石油危機の時に次ぐ戦後2番目のマイナス幅になった。⑧先導役だった輸出の落ち込みが大きい。⑨欧米経済の底も見えないだけに、今後も外需に期待できない局面が続くだろう。
- V ⑩景気の底割れを防ぎ、失業者を支えるためには、財政面から切れ目なく対策を打っていくことが欠かせない。
- VI ⑪ただし、対策を理由に総選挙を先送りするのはおかしい。⑫国民の信任を得た政権をつくるのが、危機の脱出には不可欠と考えるからだ。
- VII ⑬ともあれ、秋までにある総選挙では、危機脱出を担うにふさわしいのはどの党かが最大の争点になろう。⑭今度の経済対策はその力を国民に問うものになるはずだ。
- ⑮麻生首相と自民党はそう心得て立案してもらいたい。
- VIII ⑯民主党もそれに対抗する案を並行してつくり、国民へ示してほしい。
- IX ⑰危機克服への戦略は、日本の未来を大きく左右する。⑱将来の成長や社会の安定に向けた分野を位置づけ、そこへ人・物・金を集中させる。⑲戦略づくりは、それを中心に据えるべきだ。

- X ⑳これから世界に類のないスピードで高齢化が進む。㉑そのなかで、温室効果ガスの排出をできるだけ抑えた産業構造を築く。㉒こうした課題を解決するには、知識を高度化しそれを担う人材を育成する必要がある、教育の充実がかつてないほど重要になってくる。
- XI ㉓とって、つぎ込める財源には限りがある。㉔対象を精選し、最少のコストで最大の効果を上げる工夫が欠かせない。㉕無駄な道路やダムなど旧来型の公共事業は退場させて、本当に役立つ分野にこそ費用をかけたい。㉖失業者のための財源も手厚くせねばならない。
- XII ㉗将来の国民負担も含めて、それらの全体像を示すべきだ。
- XIII ㉘政府・与党の一部には、相続税を免除する代わりに無利子とした国債や、政府が独自の紙幣を発行し、財源にしようという動きがある。㉙無利子国債は富裕層への優遇策であり、政府紙幣は通貨価値の信認を破壊する「禁じ手」だ。㉚そんな策を必要とするほど破滅的な事態に至っているわけではない。
- XIV ㉛通常の国債を追加発行しつつ、財政規律を大切にす姿勢を政府が示す。㉜それが、国民に信頼され、経済対策の効果を高めることになるだろう。

表2 用例1：社説の論理構成

	段落と文の番号	論理構成の要素	内容の要約文
序論	段落Ⅰ①②	問題提起	麻生政権には経済危機に臨む政治力があるか。
↓	段落Ⅱ③	↓	
↓	段落Ⅲ④⑤⑥	焦点化	総理、追加経済対策の検討を与党幹部に指示。
本論	段落Ⅳ⑦⑧⑨	裏付け / 見解	昨年の経済成長率は戦後2番目のマイナス幅に。
↓	段落Ⅴ⑩	見解	景気、失業者支援には経済対策が欠かせない。
1	段落Ⅵ⑪⑫	疑問の提示	が、経済対策を理由に総選挙先送りはおかしい。
↓	段落Ⅶ⑬⑭⑮	トピック化 / 提言⑲⑳への接続	ハズダ文で後続文脈⑲、㉑の提言への接続。 <u>この経済対策は総選挙で政党力を国民に問うものになるはずだ。</u>
2	段落Ⅷ⑯	意見(要望)	民主党への要望。
↓	段落Ⅸ⑰⑱⑲	提言	<u>危機克服の戦略は将来の成長や社会の安定分野に人・物・金を集中させ、中心に据えるべきだ。</u>
↓	段落Ⅹ⑳㉑㉒	巨視的見解	社会の諸問題の課題解決には教育の充実が重要。
↓	段落Ⅺ㉓㉔㉕㉖	具体的見解	限りある財源の適材適所への分配が重要。
↓	段落Ⅻ㉗	提言 / ベキダ文	財源の確保と分配の全体像を示すべきだ。
↓	段落ⅩⅢ㉘㉙㉚	/ 意見	無利子国債や政府紙幣に頼る事態ではない。
結論	段落ⅩⅣ㉛㉜	まとめ	財政規律を大切にす姿勢を示せば、国民に信頼され、経済対策効果が高まるだろう。

用例1の社説は前半部で話題を絞り込み、後半部で論者の意見を展開する二部構成となっている。二部構成の前後半の議論の分岐点に位置するのが、段落Ⅶ⑭のナルハズダ文である。論者は前半部でまず、政府の追加景気対策の検討が始まることを読者に情報提供し、次いでその背景や経済の現状を叙述している。このように追加経済対策の全体像を示した上で、論点である総選挙先送りとの関連づけに対する与党批判に話題を絞ってゆく。表2からその論理展開の過程が把握できる。

ここでのハズダ文（今度の経済対策はその力を国民に問うものになるはずだ。）は、後続の議論に入るための**問題提起**（トピックセンテンス化）<sup>2</sup>の機能を有する。論者はナルハズダ文によって論点を明確化し、読者に示している。と同時に、ハズダ文は与党に対する論者の意見を、読者、そして与党自身に訴える機能（ナルハズダ文に続く文⑮で、論者は麻生首相と自民党に向けて直接的なメッセージを発信している。）を合わせ持っている。

ナルハズダ文には、論者による「この経済対策によって政党の政策立案能力や実行能力を国民が見極める指針となることが当然求められるわけであり、だからこそ、与党は現状に即した最良の案を練り、具現化に努めてほしい」という主張が反映されている。ハズダ文で示される内容は、金子(2000)の考察<sup>3</sup>で述べられているところの「好ましい状況を確認させることにより、再び提言、意見を強く印象づける」という機能に当たる。「今度の経済対策がその力（政党力）を国民に問うもの」にナルことが論者の理想であり、そうナルベキダと読者、与党双方に訴えているのである。

ナルハズダは「ナルトオモウ」、「ナルダロウ」、「ナルニチガイナイ」などの類似モダリティで言い換えても、論理的に何ら問題は生じない。しかし、これらのモダリティにはハズダのような相手に持論を強く訴えかける働きは見られない。論者の思考によって形作られた主張が、論者自身の内部で自ら納得し、そこで完結してしまうからである。

ナルハズダは論者の内部で完結してしまう前述のモダリティ群とは一線を画す。相手に強く働きかける機能が議論文におけるハズダ（広義のハズダではなく、あくまでも議論文で用いられるハズダに限定される。）の特徴であり、従来的一般化された推量のモダリティという切り口だけでは捉えきることができない機能があるのである。

ここでのナルハズダの機能は望ましい在り方としての**問題提起**（トピックセンテンス化）にとどまらない。**後続文脈の提言への接続**という機能も担っている。**問題提起**

<sup>1</sup> 劉（1998：185-187）の考察による「主張をまとめる『はずだ』」が、本稿で言うところの機能①**問題提起**（トピックセンテンス化）と後続の提言への接続に相当する。用例分析の結果、機能①のハズダ文は、後続文脈への論理展開の出発点となるマーカーのようなものだと考え、**問題提起**（トピックセンテンス化）という表現を用いた。劉も同様の考察を行っており、「主張をまとめる『はずだ』」は「後続段落のトピックセンテンスとなり、強い結束力を示す」と述べている。

<sup>2</sup> 金子（2000：123-126）はナルハズダ系、変化ハズダ系ともに、用例の論理展開について、「好ましい状況への変化をハズダで示唆し、そのためには提言・意見の通りにするよう訴える流れとなっている」（[提言→ハズダ→提言]）との見解を示している。



〈トピックセンテンス化〉をするからこそ、後続文脈の提言への接続機能が付随して表れるのである。

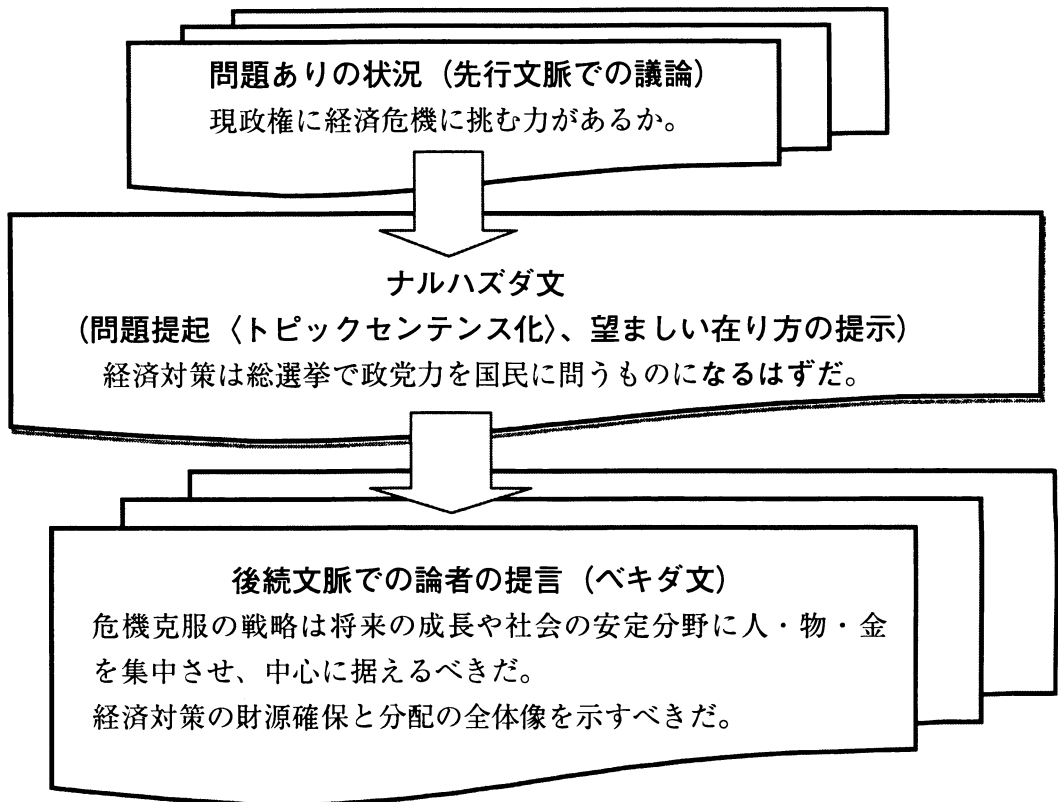
ナルハズダ文で問題提起〈トピックセンテンス化〉した後に続く後続文脈は、すべて論者の意見群である。とりわけ重要なキーセンテンスは、論者の提言である段落Ⅸの文⑱「戦略は将来の成長や社会の安定分野に人・物・金を集中させ、それを中心に据えるべきだ。」と段落Ⅺの文⑳「財源の確保と分配の全体像を示すべきだ。」である。ナルハズダ文で提示された望ましい在り方（「今度の経済対策がその力（政党力）を国民に問うものになる」こと）を具現化するためには、「⑰危機克服への戦略は、日本の未来を大きく左右する」ので、「⑱将来の成長や社会の安定に向けた分野を位置づけ、そこへ人・物・金を集中させる」ことが必要であり、だから「⑲戦略づくりは、それを中心に据えるべき」なのである。このようにナルハズダ文で示された問題提起〈トピックセンテンス化〉が、文⑱のベキダ文の提言に論理によって接続される。これが議論文におけるハズダ文の機能のひとつである提言への接続<sup>4</sup>である。

同様に後続文脈では、文㉑におけるもうひとつのベキダ文の提言によって、具体的な与党への提言群㉒から㉓がまとめられている。そして、この論理展開部も先行文脈のナルハズダ文をベキダ文で受けることによる提言への接続となっているのである。

---

<sup>4</sup> ハズダ文で問題提起〈トピックセンテンス化〉された話題（望ましい在り方、好ましい状況）に対して論者がこのようにすれば、理想の実現に近づくということを後続文脈で提言し具現化に向けた行動を期待する。これが提言への接続の論理展開である。

図1 用例1におけるナルハズダ文と先行文脈、後続文脈との論理関係



### 3.2.2 デキル (可能) ハズダ系

#### 用例2 機能② 先行文脈での提言を帰結 (努力の促し)

「東京都政 首都もチェンジの好機だ」(朝日 2009.7.16)

- I ①東京都議選は総選挙の前哨戦として注目を浴びたが、民主党圧勝という結果は当然ながら首都の施政の構図を大きく変えた。②都議会で自民・公明の与党体制ができて30年、初の過半数割れである。③石原慎太郎知事のかじ取りにも影響を与えずにはおかない。
- II ④石原知事は「総選挙の前相撲にされ、大迷惑な結果になった」と述べた。⑤選挙結果が都政への不信任であるという見方を否定したわけだ。
- III ⑥確かに、朝日新聞の都民への世論調査では52%が知事を支持している。⑦今回の投票行動をまるごと石原都政への批判とは言えない。⑧だが、知事と二人三脚で走る自公体制の足場が崩れてしまったことも事実である。
- IV ⑨与野党で主張が割れている政策については、見直しが必至となろう。
- V ⑩日本の台所・築地市場の移転問題について、民主党は「強引な移転に反対」と都議選のマニフェストに明記した。⑪移転予定地で高濃度の土壌汚染が見つかり、「食

の安全」に不安を抱く都民も少なくない。⑫白紙撤回も選択肢に加えた根本的な計画の練り直しが迫られよう。

VI⑬知事の肝いりで設立され、ずさんな融資で多額の税金を失う結果となった新銀行東京を、いたずらに存続させる意味はもはやない。⑭民主党もそう主張している。

⑮業務の整理縮小や事業譲渡を早急に検討するべきだ。

VII⑯高い支持率と与党の数の力を後ろ盾にし、強力な指導力と果敢な行動を見せてきたのが石原流の都政だ。⑰先進的な環境政策など、その流儀が生きた取り組みもあった。⑱半面、反対意見を封じ、独断専行に走りがちでもあった。

VIII⑲今後は「専断型」から「調整型」へ大きくかじを切らなくては、前へ進むことはできなくなろう。

IX⑳この10年間、五輪誘致など世間の耳目を引く政策立案が目立った。㉑これから福祉、医療、教育など、生活の足元にもっと目を向けて欲しい。㉒今回の選挙結果からそんなメッセージも読み取れるはずである。

X㉓知事は、次回知事選には出馬しない意向だ。残りの任期で、新たな境地を切り開いてもらいたい。

XI㉔躍進した民主党にも、注文がある。㉕これまでは知事の人気の前に独自色を発揮できず、野党と与党の中間の「ゆ党」とも揶揄（やゆ）された。㉖今回は「野党」を大看板に掲げて支持を得たことを忘れてもらっては困る。

XII㉗知事との対決も恐れずに公約を実現させる胆力が必要だ。㉘実現可能な代案を提示することも、第一党の責務である。㉙議会によるチェック機能を生かし、議論を積み重ねて政策を深めることができるはずだ。

XIII㉚国から地方への権限移譲、東京一極集中の見直しなど、首都が主導権を発揮すべき問題は山のようにある。

表3 用例2：社説の論理構成

	段落と文の番号	論理構成の要素	内容の要約文
序論	段落Ⅰ①②③	話題提示	都議選は民主圧勝、石原都政に影響を与えるだろう。
	段落Ⅱ④⑤	事実/判断	石原知事は選挙結果を、都政への不信任と見ないコメントを発表。
本論	段落Ⅲ⑥⑦⑧	分析/見解	知事の支持率は悪くないが、自公体制の基盤は崩壊。
	段落Ⅳ⑨	問題提起	与野党で意見割れの政策は見直しが必至だろう。
1	段落Ⅴ⑩⑪⑫	例示/見解	築地市場の移転問題は見直すべき政策の一つだ。
	段落Ⅵ⑬⑭⑮	提言	<u>新銀行東京は業務縮小整理や事業譲渡を検討すべきだ。</u>
	段落Ⅶ⑯⑰⑱	評価	石原都政に対する論者の正負の評価。
	段落Ⅷ⑲	提言	都政は「専断型」から「調整型」への転換が必要だ。

<p>本論 2 ↓ ↓ 結論</p>	<p>段落Ⅸ⑳㉑㉒  段落Ⅹ㉓ 段落Ⅺ㉔㉕㉖ 段落Ⅻ㉗㉘㉙  段落Ⅼ㉚</p>	<p>意見 提言⑮⑰ の帰結 要望 意見 →具体論 提言㉗㉘の帰結 まとめ</p>	<p>ハズダ文で先行文脈⑮の提言を帰結。 今回の選挙結果からそんなメッセージも読み取れるはずである。 石原知事に新たな境地開拓を望む。 民主党への注文。 →公約実現力が必要。実現可能な代案提示も責務。 ハズダ文で先行文脈㉗、㉘の提言を帰結。 議論を積み重ねて政策を深めることができるはずだ。 首都が主導権を發揮すべき問題は多い。</p>
------------------------------------	---	---	--

用例2は序論、本論、結論の三部構成としてとらえると分かりやすい。序論（段落Ⅰ～段落Ⅲ）では議論の導入部として、都議選の民主党圧勝という結果が石原都政の転換点となることが叙述されている。

続く本論（段落Ⅳ～Ⅹ）が議論の中心部となる。論者は与野党で主張割れている政策の見直しが必至だと述べた上で、築地の移転計画については、段落Ⅴ⑫「白紙撤回も選択肢に加えた根本的な計画の練り直しが迫られよう。」と反対の立場から意見を述べている。さらに、新銀行東京については、段落Ⅵ⑮「業務の整理縮小や事業譲渡を早急に検討するべきだ。」とベキダ文を用いて強く反対の意を表明している。

論者は今回の選挙結果が石原都政の転換点への好機になるだろうという考えにもとづき、「専断型」から「調整型」へチェンジすることを期待すると同時に、生活に根差した政策の実行（段落Ⅸ⑳「これからは福祉、医療、教育など、生活の足元にもっと目を向けて欲しい。」）を期待している。

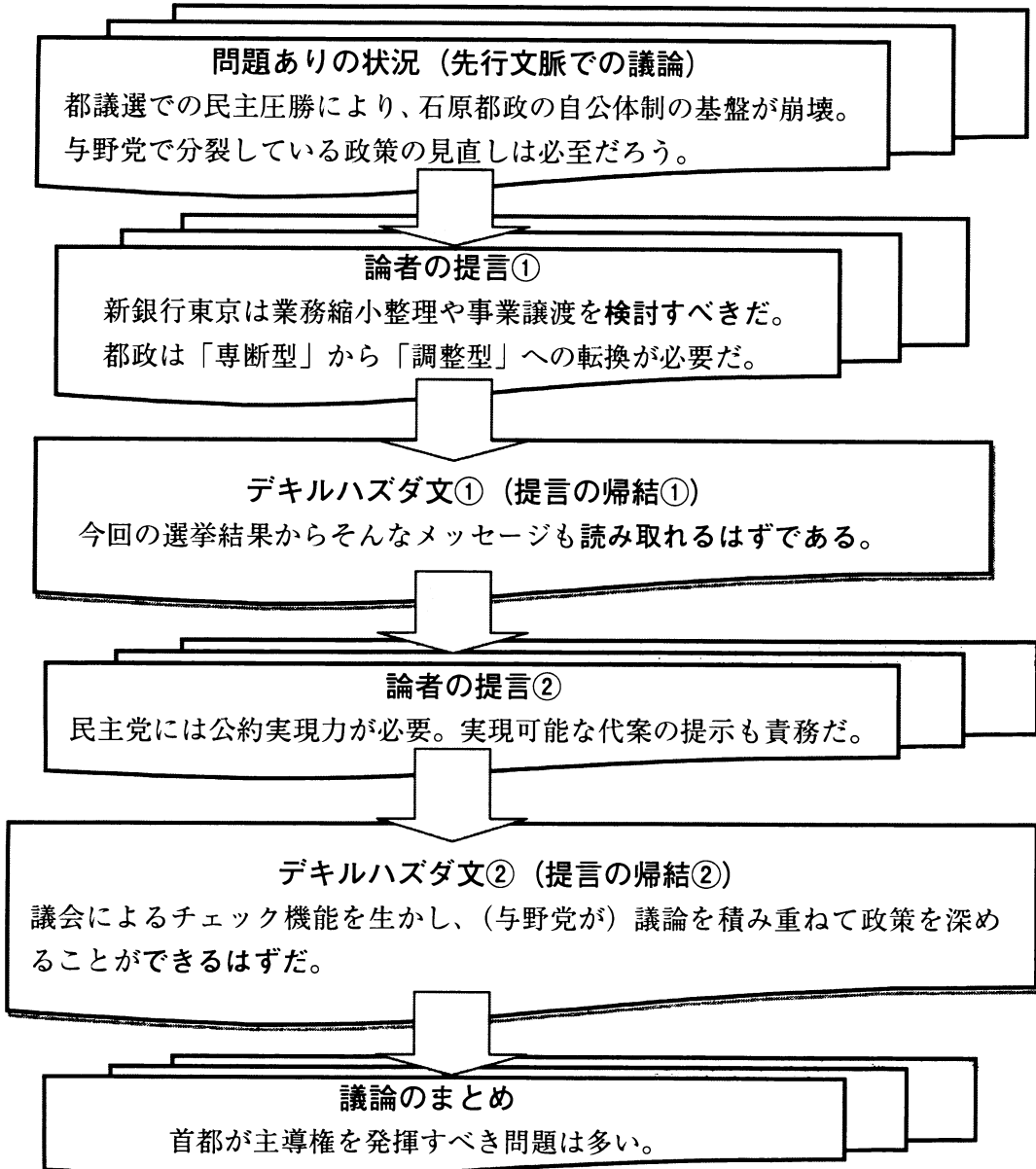
本論で述べられた提言を受けて、段落Ⅸ㉒のデキルハズダ文はこれらの先行文脈を帰結している。同時に、㉒「今回の選挙結果からそんな（先行文脈の提言）メッセージも読み取れるはずである。」は、石原都政に対する論者のメッセージとして発信されている。論者はこの転換点を好機に都政はチェンジすべきだと考え、金子（2000）が述べているように、その具現化に不可欠な潜在能力や可能性を示唆した上で、実現を目指して努力するように求めていると考えることができる<sup>5</sup>。

結論に当たる第三部（段落Ⅺ～ⅩⅢ）は、民主党に対する提言が述べられている。論者は民主党に対して、公約実現力によって政策を具現化することを主張している。先行文脈㉔～㉘で発せられたこれらの提言を、文㉙のデキルハズダ文（議会によるチェック機能を生かし、議論を積み重ねて政策を深めることができるはずだ。）によって帰結するという論理展開となっている。ここで用いられているハズダ文も、前述の石原都政に対する論者のメッセージ同様、民主党へのメッセージと言える。民主党には政策立案能力とそれを実現する実行力（具現化に不可欠な潜在能力や可能性）があ

<sup>5</sup> 金子（2000：128）は「本来的な能力、可能性の存在を強調することによって、相手や自分自身を励ましたり、さらに、自分、知人の本来的な能力をアピールして、チャンスを与えてくれるように頼むこともできる。」という見解も示している。

ることをデキルハズダ文で示唆し、その具現化に向けて努力と行動を求めているのである。

図2 用例2におけるデキルハズダ文と先行文脈、後続文脈との論理関係



### 3.2.3 アル（存在）ハズダ系

#### 用例3 主機能③批判（問題の本質を無視、または気づかぬ相手を非難）、副機能① 後続文脈の提言への接続

「ソニー人員削減 日本型経営の意地見せよ」（朝日 2008.12.11）

- I ①米国発の金融危機による世界的な不況の大波が、日本を代表する企業の人員削減にまで及んできた。
- II ②ソニーが日本企業としては最大規模の人員削減を発表した。③本社や国内外の工場で働く正規社員16万人のうち5%にあたる8千人、派遣や請負の非正規労働者8千人以上の計1万6千人以上を1年余りの間に減らすという。
- III ④世界的な消費悪化、円高、株安と経営環境はいわば三重苦の状態にある。⑤ソニーが生き残りをかけてリストラに取り組もうとするのもわからないではない。
- IV ⑥しかし影響力の大きい企業だけに、産業界全体の人員削減を誘発することがないかと心配だ。⑦5年前、同社の大幅減益見通しが日経平均株価を急落させ「ソニーショック」と言われたことは記憶に新しい。⑧今度も雇用版ソニーショックとなりかねない事態だ。
- V ⑨トヨタ自動車も期間従業員など3千人を減らす方針だ。⑩それを含め自動車大手12社の削減計画は合計1万人を超える。⑪自動車や電機などすそ野の広い産業による人減らしの動きはすさまじい雇用悪化の連鎖を呼びかねない。
- VI ⑫この数年、日本企業の業績回復は、米国市場や中国など新興国市場への輸出に支えられてきた。⑬その支えを失いつつあるだけに、産業界が今後のさらなる景気悪化に備えて身構えるのも無理はない。
- VII ⑭ただ、個々の企業の経営判断が合理的であっても、経済界が一斉に人減らしを始めれば、街には失業者があふれる。⑮雇用不安から消費は萎縮（いしゆく）し、日本の景気はますます悪化する。
- VIII ⑯世界同時不況にかこつけて、この際、不振事業を片づけてしまおうという企業の思惑もちらつく。⑰ソニーの発表を受けて、河村官房長官が「雇用調整は一つの経営手段だが、乱用は困る」と注文をつけたのは当然である。
- IX ⑱10年前、米格付け会社から「終身雇用の維持が競争力を弱める」として格下げされたトヨタが猛反発し、大論争になったことがあった。⑲結局、5年後に終身雇用を含めてトヨタ経営が再評価され、最高格付けに戻った。
- X ⑳雇用は経営の「調整弁」ではない。㉑だから人員削減に安易に乗り出さない。㉒そういう社会的責任にこだわるのが「日本型経営」の良き伝統だった。
- XI ㉓企業も業績が悪化してつぶれてしまっは元も子もない。㉔だが雇用に手をつける前にやるべきこと、挑むべきことがあるはずだ。
- XII ㉕かつて先駆的な製品を世に送り出してきたソニーには、新製品の開発や新分野の

開拓によって新たな雇用を生み出す努力をしてほしい。②⑥雇用を守るだけでなく、創（つく）り出す。②⑦そういう新・日本型経営が必要だ。

X Ⅲ②⑧日本の経営者たち、今こそ意地の見せどころだ。

表4 用例3：社説の論理構成

	段落と文の番号	論理構成の要素	内容の要約文
序 論 ↓ 本 論 1 ↓ ↓ ↓ 本 論 2 ↓ ↓ 結 論	段落Ⅰ①	話題提示 ↓	米国の金融不況が日本企業の人員削減に影響を及ぼしている。
	段落Ⅱ②③	焦点化	ソニーが最大規模人員削減を発表した。
	段落Ⅲ④⑤	事実／見解	生き残りをかけたリストラも分らぬことはない。
	段落Ⅳ⑥⑦⑧	懸念	だが、産業界への人員削減誘発が心配だ。
	段落Ⅴ⑨⑩⑪	例示／見解	同例のトヨタや電機業界のリストラは雇用悪化の連鎖を招く。
	段落Ⅵ⑫⑬	別視点（事実）からの見解	日本企業の業績回復は米中等の輸出に支えられてきた。支えを失う不安からのリストラも無理はない。
	段落Ⅶ⑭⑮	問題提起	経済界が一斉にリストラすれば、景気は悪化する。
	段落Ⅷ⑯⑰	例示／意見	リストラには企業の不振事業整理の思惑も見られる。
	段落Ⅸ⑱⑲	例示	かつて、トヨタの終身雇用制が批判された。
	段落Ⅹ⑳⑳㉑㉒	→見解	安易にリストラしないのが「日本型経営」の伝統だった。
	段落Ⅺ㉓㉔	批判／提言⑳㉕㉖ ②⑦への接続	ハズダ文による批判と後続文脈の提言への接続。 <u>雇用に手をつける前にやるべきこと、挑むべきことがあるはずだ。</u>
	段落Ⅻ㉕㉖㉗	提言	<u>ソニーは新たな雇用創出の努力をしてほしい。</u>
	段落ⅩⅢ㉘	まとめ	今こそ、日本の経営者の意地の見せどころだ。

用例3の後半結論部に登場するアルハズダ文（雇用に手をつける前にやるべきこと、挑むべきことがあるはずだ。）は、主機能と副機能を有する。前者は先行文脈を受けて話題上の相手を批判する機能であり、後者は主機能に付随した後続文脈の提言へと接続する機能である。

論者はソニーの大量リストラ計画案に対して、経営環境悪化の見地から一定の理解を示しつつも、リストラによるマイナス面の影響を論拠に、アルハズダ文によってソニーの雇用削減案を批判している。企業の都合によって雇用調整が「調整弁」として利用され、企業の社会的責任や義務である労働者の生活保障を無視した行動に疑問を呈している。

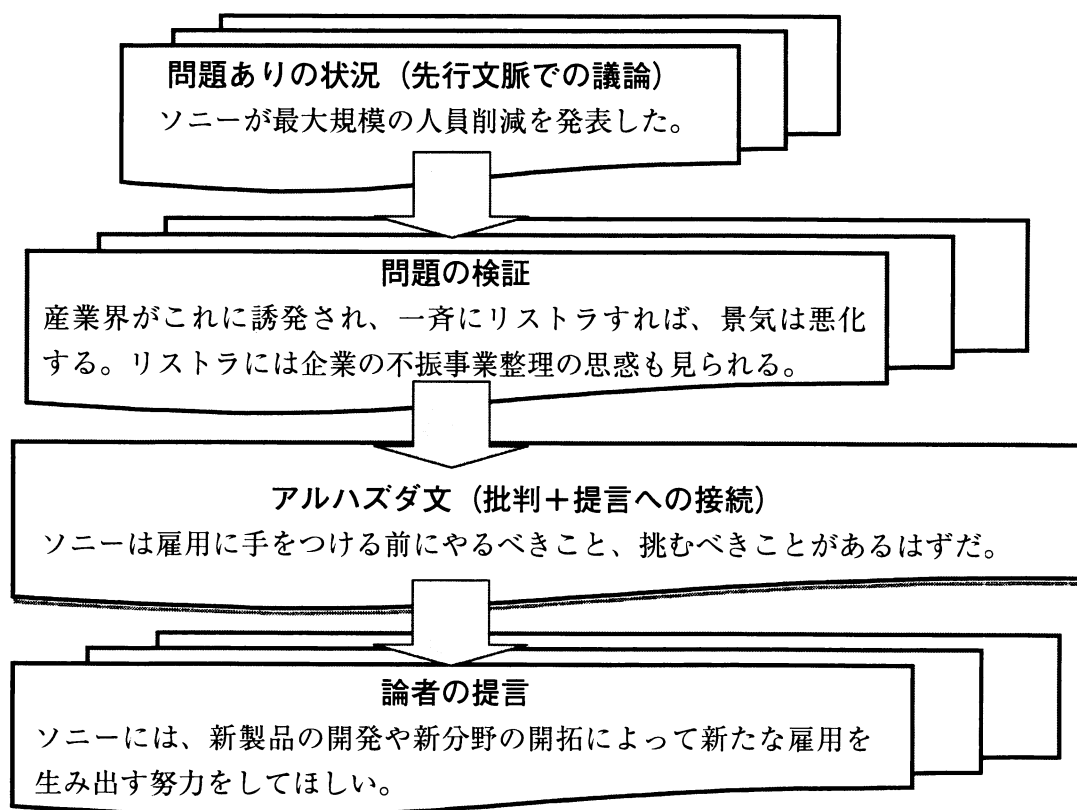
社説の論理構造は次の通りである。まず、序論でソニーのリストラ計画発表がまず話題として提示され、続く本論で問題の背景やその影響、企業の思惑、終身雇用の再評価など、問題をめぐる検証がなされる。そして、これらの先行文脈で議論された問題の検証を受け、アルハズダ文によって論者のメッセージが発信されるという展開である。

論者はリストラの前にすべきことが「アルハズ」にもかかわらず、「ナイ」ことと

して現状無視の決定を下したソニーに対して、なぜ「アルハズ」のことを無視するのか、「アルハズ」のことを直視して再考すべきだと訴えている。

このアルハズダ文は、直後の後続文脈（段落Ⅻの文②⑤～②⑦）の提言に接続（ソニーには、新製品の開発や新分野の開拓によって新たな雇用を生み出す努力をしてほしい。）する機能も有する。アルハズダ文を受けた提言の内容は、具体的に新製品開発や新分野の開拓によって苦境を打破できる能力や可能性がソニーには「アル」のだから、自ら再評価し、努力と改善を促すというものである。「アル」という根拠は、先駆的な製品を世に送り出してきた実績である。

図3 用例3におけるアルハズダ文と先行文脈、後続文脈との論理関係





#### 4. 結論 同質化——社説（議論文）におけるハズダの効果

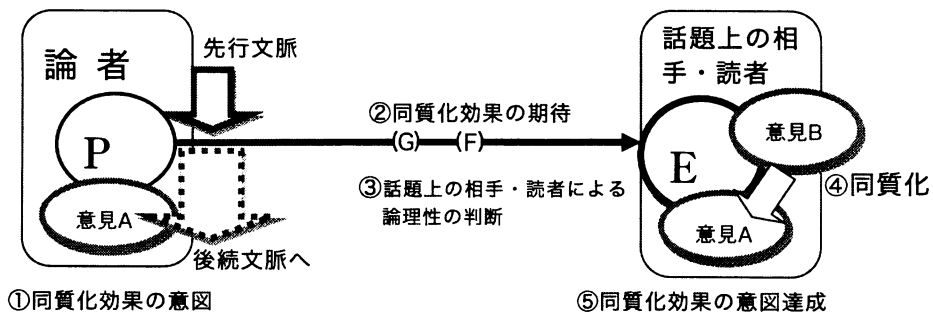
第3節でハズダの3つの機能の分析と考察を行った結果、社説（議論文）におけるハズダは単なる推量にとどまらず、話題上の相手に強く働きかける特徴があることが浮かび上がった。これらの機能の相手への働きかけとは、ハズダ文によって論者の主張や要望、示唆、具現化への努力の促し、再考・改善の促しなどのメッセージを発信していることにほかならない。詳細は前節の考察で述べた通りである。

社説（議論文）におけるハズダ文は推量のモダリティというより、もはや相手への訴えというイメージで捉えた方が実体に近いのではないだろうか。この論者の訴えこそが社説（議論文）におけるハズダ文の効果であり、これを同質化<sup>6</sup>という用語で表す。

ハズダ文による論者の訴え、すなわち同質化は最終的に何を目的とするのか。それは論理によって論者の論理の正当性を相手に訴え、論者の持論に引き込むことにある。さらに、この訴えは論者の思い描く理想的な望ましい在り方を具現化するために、相手に行動を促すことをも意図している。故に第3節の分析・考察から抽出された機能系が同質化効果の目的をもって用いられるのである（同質化効果達成のモデルを図4に示した）。ここに同質化の定義を次のように定める。

同質化とは、議論文において対立意見を持つ話題上の相手、および読者に論理的な正当性を訴えた上で、相手を論者の持論に引き込み、論者と同様の意見に転向させる働きである。

図4 社説におけるハズダ文の同質化効果が達成した局面の構図



ⓐ—(G)—(F)—→は、ハズダ文を示す。(G)はハズダの論拠 (Ground)、(F)はハズダの機能 (Function)、Pは効果の意図 (Purpose)、Eは効果の発生 (Effect)、→はハズダの効果を期待する対象の方向を示す。

<sup>6</sup> 大水 (2009) は意見文のハズダの考察において同質化という語を用いてハズダの効果の考察を試みた。しかし、論文の中では同質化の定義は明確に示されていない。

社説（議論文）のハズダが同質化を指向する理由は、論者が議論の過程において相手よりも優位に立つためにほかならない。ハズダは論拠によって前後の文脈中に置かれている提言と強固に結束し、次の文脈へと続く論理の道筋の方向性を決定づける機能を有する。ここに他の推量のモダリティとは大きく異なる特徴があるのである。

## 5. おわりに

本研究は金子（2000）の研究を基盤とし、その分類方法や用語を借りて社説という微視的な対象からハズダの論理関係の分析と考察を試みた。結果、金子（2000）の機能分類（表5）を本研究によって再検証した上で、その特徴をより具体的に提示することができた。

金子（2000）の分析との差異は、**問題提起〈トピックセンテンス化〉**を抽出したことである。しかし、これは社説という性質上、ハズダが持っている純粋な機能として捉えるべきものか、論理構成上の戦略的なレトリックによるものなのかは今後見極めなければならない課題である。但し、社説のハズダ文においては、**問題提起〈トピックセンテンス化〉**が論理展開上、重要な機能として働いているものと本研究では結論づけた。

また、もうひとつの差異として**批判の機能**が各ハズダ系に認められる。こちらも**問題提起〈トピックセンテンス化〉**と同様に、社説の論理展開上のレトリックから生成される機能ともいえる。しかし、社説のハズダ文においては、この**批判**も重要な機能の一環を担っていると考える。それは**問題提起〈トピックセンテンス化〉**にせよ**批判**にせよ、最終的にハズダがめざす**同質化**へと論理的に結びついてゆく機能だからである。

この**同質化**こそが社説（議論文）におけるハズダの各機能がめざす本質的な目的であり、これまでの先行研究では明らかにされなかった本研究の考察の結果である。

参考資料

表5 金子（2000）の分類と分析を本研究で表にまとめたもの

分類		意味と用法の分析
ナルハズダ系	ナルハズダ系	[問題ありの現状→提言（そうすれば）～ナルハズダ→提言] ①気づき・納得 ②提言の接続・帰結（好ましい状況を確認させ、提言を印象づける）
	変化ハズダ系	[提言〈ベキダ・コトダ〉→（そうすれば）/～ば、Q変化ハズダ→提言]（P→pば、Q） ①好ましい状況の示唆→提言・意見の実行を促す ②ハズダで受けるQが良い結果なら、提言Pを強調する
デキル（可能）ハズダ系		[アイデア・提言→（そうすれば）～デキルハズダ→アイデア・提言] 本来持っている可能性の示唆/発現の阻害条件の克服/可能にするための提言 (できるはずだから、やってみて/やっていない/できるはずなのに) ①能力・可能性を示唆→気づかせ、努力を促す 本当にVば、できるはずですが→対偶：できないのは、Vないからです ②能力・可能性が発現されていない現実を強調→非難 〈現実の状況〉 〈あるべき状況とのギャップの原因〉 〈機能〉 できない状況 できることを認識していない 気づかせ、励ます できない状況 できるのに努力していない 非難・叱責 できなかった状況 できるのに努力しなかった 非難・叱責 できなかった状況 障害によりできなかった 無念に対する同情
アル（存在）ハズダ系		[ない現状 たしかアルハズダ よく見て →探そう 探せ] 本来アルハズダ よく考えて
アル（存在）ハズダ系		現実とのギャップを強調して何とかならないかと訴える（タイハズダを使うと、その願い、その欲求は本来的なものであるということが強調され、それが活かされていない現実の含み持つ問題がクローズアップされる）。

金子（2000）に基づいて作表（2009.1）

## 引用文献

- 金子比呂子 (2000) 「『はずだ』の意味と用法—意見文における使い方—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』 26号
- 劉向東 (1998) 「社説における『はずだ』と『わけだ』の使用状況と機能について」—『1998年度日本語教育学会予稿集』

## 参考文献

- 池尾スミ (1970) 「判断辞のように用いられる形式名詞—『はず』とその周辺」『日本語と日本語教育』第2号 慶應義塾大学国際センター
- 大水利之 (2009) 「意見文におけるハズダの効果に関する一考察 —『かけひき』の視座から見たその機能と文脈的展開—」『社会言語科学会 第24回発表論文集』社会言語科学会
- 高橋太郎 (1975) 「『はずがない』と『はずじゃない』—『言語生活』289号
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版 pp.265-272
- 宮崎和人 (2002) 「第2章 認識のモダリティ 認識のモダリティの諸形式」——『新日本語文法選書4 モダリティ』仁田義雄 他編 くろしお出版 pp.121-171
- 松木正恵 (1993) 「『～はずだった』と『～はずがない』～過去形・否定形と話者の視点」『早稲田大学教育学部学術研究 国語・国文学編』通号42 早稲田大学教育会
- 松木正恵 (1994) 「時制と視点 ～「はずだ」を中心に」『早稲田大学教育学部学術研究 国語・国文学編』通号43 早稲田大学教育会
- 松田礼子 (1994) 「『はずだ』に関する一考察～推理による概念の世界と、その外に実在する現実の世界をめぐる」『武蔵大学人文学会雑誌』26(1) 武蔵大学人文学会編
- 三宅知宏 (1995) 「ニチガイナイとハズダとダロウ」—『日本語類義表現の文法(上) 単文編』くろしお出版 pp.190-196
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店 pp.950-953
- 森山卓郎 (1995) 「ト思ふ、ハズダ、ニチガイナイ、ダロウ、副詞～」『日本語類義表現の文法(上) 単文編』くろしお出版 pp.171-182